ネガティブなニュースを「好む」のは誰か？

村上幸史

(神戸山手大学 現代社会学部)

key words: 主観的幸福感・ニュース・しろうと信念

Who "prefer" the negative news?

Koshi Murakami

(Kobe Yamate University Faculty of Contemporary Society)

key words: subjective happiness · news · lay theory

(問題)

テレビや新聞、ネットなどで報じられるニュースは、事故や犯罪、トラブルなどネガティブなものが多い。その理由として、しばしば耳にするのは「人の不幸は蜜の味」という表現である。果たして、他者に生じたネガティブなニュースは、万人に好まれているものだろうか。

この問題を考えるにあたり、想定されるのは他者と自分を比較した相対的な幸福感の存在である。Lyubomirsky & Ross (1997)は、幸福感が低い者は他者の様子を意識しやすく、それが自己評価と関連することを示している。相対的剥奪理論によれば、幸福感が低い者はより不幸な者と比較を行うことで、相対的な幸福感を高めている可能性がある。

本研究で注目するのは「成功するための資源が一定量しかなく、取り合いになる」という、対人間に仮定される資源の限定観の存在である。村上 (2012)は、この「対人的定量感」が主観的幸福感を低下させることを示している。例えば「自分の幸福を奪う存在」としての他者は失敗の帰属原因であり、相対的な幸福感を低下させる原因になっていると考えられる。

本研究では、この「対人的定量感」がネガティブなニュースの関心度合いと関連しており、対象人物への感情や主観的幸福感を変化させるという仮説を立て、以下のような実験を行い検討を行った。

(方法)

参加者 大学生 53 名 (男性 26 名、女性 27 名)。全てのセッションに参加していない者を除いた 38 名を分析対象とした。

手続き 第一セッションとして、参加者には「幸福と幸運に関する調査」として、質問紙に回答を求めた。2 週間後に「ニュースに関する調査」を行うことを説明し、質問紙に回答を求めたあと、新聞記事を印刷したもの配布した (第二セッション)。記事は現実生じた「毒物発言で失職」「落書きで野球部監督を解任」「飲酒運転をつぶやき停学」という 3 つの記事から構成されており、いずれも内容は加害者の責任でネガティブな結果を招いたものになっている。その内容を読んでもらった後、内容について再度回答を求めた (第三セッション)。

回答項目 第一セッションで回答を求めた項目は、運に関する態度項目、主観的幸福感尺度 (SHS、島井ら, 2004)、全般的な生活満足度尺度 (SWLS、大石, 2010) である。これに加えて、他者の不幸に関する尺度の 2 因子 (澤田, 2008) に加えて、「幸福だ」「不幸だ」「ざまあみろ」など感情に関する項目 (7 段階) についても回答してもらった。

第二セッションでは、10 種類のニュース記事についてタイトルのみを提示し、その認知度と関心 (5 段階) に回答してもらった。このニュース記事の割合は、新聞記事を分析した割合を元に構成した。加えて、資源の限定観に関する項目 (村上, 2012) についても回答してもらった。このうち「対人的定量感 (世界、自分の周り)」の項目については、村上 (2012) を元に「感情」(幸福や愛情など)・「勢い」(運や人気など)・「成功資源」(チャンスや出会いなど) の 3 カテゴリーに分類して用いた。

第三セッションでは、記事ごとに第一セッションと同じ感情に関する項目に加えて、この記事の対象人物が「どの程度非難を受けるべきだと思うか (自己非難)」、「記事になった当時は、読者はどの程度彼を非難していたと思うか (他者非難)」について 7 段階で回答してもらった。加えて、主観的幸福感尺度とニュースへの接

触度合いについても回答を求めた。

(結果)

ニュースへの関心度 10 種類のニュース記事への認知度は 1.39 ~ 2.18、関心度は 2.16 ~ 3.05 (各 5 段階) とあまり高くなかった。ポジティブな記事 (「人助け」と「受賞」) についての関心度は 2.89 と 2.38 であった。この関心度に関して、「対人的定量感」の高低を独立変数として分析したところ、ポジティブな記事の両方とも、「感情」カテゴリー高群の方が関心度は低かった。ネガティブな記事では第二セッションで用いた「落書き」の記事にのみ、同じ傾向が見られた。また、この記事については、主観的幸福感尺度高群ほど関心の程度は高かった。

ニュースと感情判断 第三セッションで提示した 3 つのネガティブな記事に関する平均値は Table 1 に示した。シャーデンフレイデ感情得点に関しては全体的に値は高くなかったが、「飲酒運転」のニュースが最も高く、自己非難と他者非難については「毒物発言」のニュースが最も高かった。

これらの感情評定に関して、「対人的定量感」の高低を独立変数として分析したところ、まずシャーデンフレイデ感情得点については、「飲酒運転」と「落書き」のニュースでは「感情」・「成功資源」カテゴリー高群の方が得点は低かった。逆に「毒物発言」のニュースでは、「勢い」カテゴリー高群の方が得点は高かった。

自己非難と他者非難については、同様に「感情」・「成功資源」カテゴリー高群の方が、「飲酒運転」のニュースにおいて他者非難を推定する程度が低く、「落書き」のニュースでは自己非難の程度が低かった。「毒物発言」のニュースでは、逆に「勢い」カテゴリーで自己非難、他者非難の両方ともに、カテゴリー高群の方が高かった。

幸福感との関連 「対人的定量感」のうち、「成功資源」の 3 カテゴリーのみ全般的な生活満足度尺度得点が低かった。主観的幸福感尺度得点については差が見られなかった。またセッション間での主観的幸福感尺度得点については差が見られなかった (前: 17.38、後: 17.49)。

シャーデンフレイデ感情得点については強い相関ではなかったが、全般的な生活満足度尺度得点や主観的幸福感尺度得点とは正の相関を示していた。

(考察)

全般的には「対人的定量感」はネガティブなニュースと関連していたが、その対象に対してネガティブな印象を持つ程度は「対人的定量感」の種類や記事により異なっていた。また幸福感の変動も見られなかった。

記事の対象者と回答者との年齢差による影響も考えられるが、大学生の「飲酒運転」と中年男性の「落書き」は年齢層も異なり、中年女性の「毒物発言」との非難傾向の違いは、事件の内容によるのかもしれない。また幸福感の変動については、感情的な要素を含んだ項目を用いる必要があるかもしれない。

またポジティブ記事への関心は、ネガティブ記事と比べて低いことが分かった。本実験では「自業自得」的な記事への関心度に注目したが、記事内容については検討の余地があるだろう。

(引用文献)

Lyubomirsky, S., & Ross, L. (1997). Hedonic consequences of social comparison: A contrast of happy and unhappy people. *Journal of Personality and Social Psychology*, 73, 1141-1157.

村上幸史 (2012). 奪い合いの意識は不幸を招くか？—資源の限定観からの検討—日本社会心理学会第 53 回大会論文集, 235.

(MURAKAMI Koshi)

Table 1 提示した記事に関する評定平均値

	認知度	関心度	自己非難	他者非難	シャーデンフレイデ得点
毒物発言	1.68	2.49	5.58	5.92	13.89
飲酒運転	2.11	2.76	4.82	5.21	16.08
落書き	1.95	2.43	4.97	5.08	12.92

※この研究は日本学術振興会科学研究費補助金 (若手研究 (B) 23730596) の助成を受けた